

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

へいせい ちしんかん ぶつが ほけきょう しゃか びじゆつ てんじ
平成知新館2F-2「仏画」の「法華経と釈迦の美術」に展示されている作品について勉強してみよう。

書画の修理

きんじ ほけきょうほうとうまんだら しゅうふく よ
— 金字法華経宝塔曼荼羅の修復完成に寄せて —

みな ぶんかざい ほぞん
皆さんは、文化財はなんとなく保存されてきたと思いませんか？でも、よく考えてみて下さい。皆さんも、大切なものは丁寧に扱いますよね。その反面、どうしてもいいものは、捨ててしまいます。そうです。文化財というのは、昔の人が大切だと思いつてきたからこそ、今に残っているのです。その思いを
げんざい わたし う つ ぶんかざい
現在の私たちも受け継いでこそ、未来に文化財を伝えることができるのです。もし、その思いがなくなると、
ぶんかざい きけん
文化財もなくなってしまう危険が高くなるのです。

また、日本の文化財、とくに書画は、紙や絹といった弱い素材の上に描かれているため、定期的な修理を行わないと保存できません。なぜなら、日本の絵は、紙や絹の上にきれいな色の鉱物をすりつぶして膠という動物のコラーゲン質の接着剤を混ぜて絵の具として定着させています。この絵が描かれた本紙だけではペラペラですので、裏にデンプン糊で紙を何層か貼って丈夫にし、掛軸や巻物に仕立て、最後にきれいな裂でお化粧してあげています（これを「表具」といいます）。

ところが、この表具に使われている素材は、すべて有機物で、年を経る毎に劣化を起こします。紙や絹は弱り、糊や膠は接着力を失うのです。こうなると、掛軸は掛けることができなくなり、本紙にも折れや絵具の剥落などのダメージが起こります。

ですので、本紙は取り替えることはできませんが、本紙を支えている裏打を替えてやり、あるいは、絵の具の接着力の弱った所に膠や糊を差し、絵の具がこれ以上落ちないようにする必要が出てくるのです。一般に書画の修理は、百年サイクルで行うのが望ましいと言われています。

しかし、修理には、当然ながら、お金がかかります。

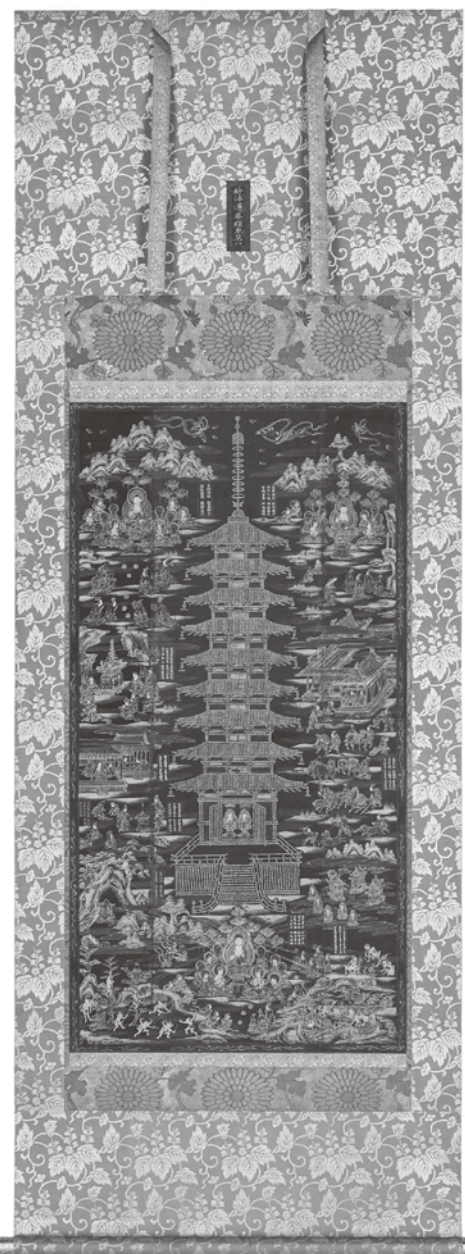


図1 重要文化財 金字法華経宝塔曼荼羅 8幅のうち1幅(表面)
鎌倉時代(13世紀) 京都・立本寺蔵

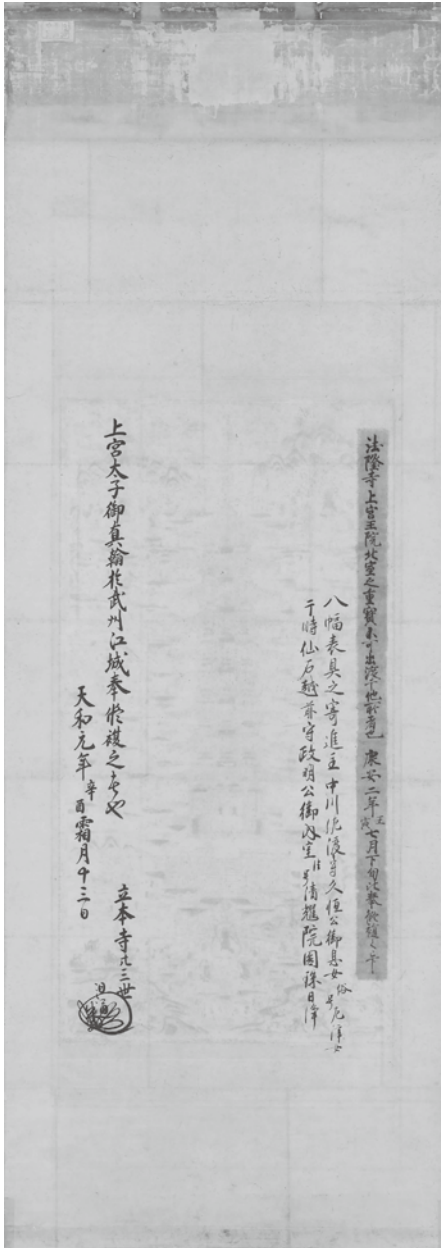


図2 金字法華經宝塔曼荼羅 8幅のうち1幅(裏面)

この費用をどうするかが、大変な問題なのです。そこで、昔の修理についてよくわかる例として、この金字法華經宝塔曼荼羅図〔立本寺蔵〕をご紹介します(図1)。

これは、『法華經』という八巻からなるお経を九重塔の形になるように八幅にわけて書写したものです。經文は、相輪の頂きから書き始め、基壇の階段右端で終了するようになっていきます。塔の周りには、お経に説かれている内容を絵で表現しています。このようなものは、平安時代の終わりから存在が確認されており、この絵も鎌倉時代、13世紀前半の作品と考えられています。

大変、立派なものであるうえ、信仰の対象であることから、大切にされてきました。なぜこんなことが言えるのか。実は、軸の裏に、過去の修理についての記録が残されていたのです(図2)。最初の修理は、康安2年(1362年)です。この時は、奈良の法隆寺の東院北室に所蔵されていました。その後、現在の所蔵先である京都の立本寺に移りました。そうして、天和元年(1681年)に豊後岡藩四代藩主中川久恒の長女・佐都子の寄進によって江戸で修理されました。現在見る表具は天和の当時そのままに残されていましたが、さすが大名のお姫様がお金を出しただけあって、総金襴の豪華な裂を用いており、表具自体が文化財としての価値を持ちます。表具は修理の時に交換されてしまうことが多いので、これは大変貴重なものです。

ここで不思議に思いませんか？ 最初に百年毎の修理が望ましいといったのに、修理の間隔が結構隔たっています。これは、修理が大変だったからです。これだけ大きく八幅もあると莫大な費用がかかります。江戸時代にはお姫様の力を借りて修理を行うことが出来ましたが、大事業だったからわざわざ修理の記録を残したとも言えるでしょう。

本図は、近年、江戸時代以来、ようやく修理を行うことができました。所蔵寺院の本図を大切に思う気持ちが、寺院を支える人々や関係者を動かし、その思いを受けて、職人さんが真心を込めて立派な修理を行ったものです。もはや、大名のような大金持ちがいなくなった現在では、私たち一人一人が力を合わせて文化財を守っていかねばなりません。私たちに出来ることはなにか是非一度考えてみて下さい。

美術室 大原嘉豊